

2009 年度 小委員会活動成果報告

(2010 年 7 月 5 日作成)

小委員会名	バリアフリーデザイン小委員会		主 査 名：岩田三千子 就任年月：2009 年 4 月
所属本委員会 (所属運営委員会)	環境工学本委員会 (環境設計運営委員会)		委員長名：井上 勝夫 主 査 名：飯野 秋成
設 置 期 間	2009 年 4 月 ～ 2013 年 3 月		
設 置 目 的 各年度活動計画 (箇条書き)	<p>・2009 年度；4 回の委員会を開催して委員の研究内容についての情報交換を行うほか、研究協議会 1 回、見学会 1 回を企画運営する。</p> <p>・2010 年度以降；次年度を見据えて 4 回の委員会を開催し、委員の研究内容についての情報交換を行うほか、公開研究会 1 回、見学会 1 回を企画運営する。</p>		
委員構成 (委員名 (所属))	委員公募の有無： なし		
	主査 岩田三千子 (摂南大学) 幹事 延原理恵 (京都教育大学) 委員 土川忠浩 (兵庫県立大学) 委員 堀越哲美 (名古屋工業大学) 委員 土田義郎 (金沢工業大学) 委員 安部信行 (八戸工業大学) 委員 村上泰浩 (崇城大学) 委員 二井るり子 (奈良女子大学)		
設置 WG (WG 名：目的)			
2009 年度予算	195,000 円	ホームページ公開の有無： あり 委員会 HP アドレス： http://news-sv.ajj.or.jp/kankyo/s18/	

項 目	自己評価
委員会開催数	4 回 (年度内計画を含む)
催し物 (シンポジウム・セミナー・研究会・見学会等)	1. 研究協議会「高齢社会の環境・設備-ユニバーサル環境デザインに向けて-」 資料：高齢社会の環境・設備-ユニバーサル環境デザインに向けて-
目標の達成度 (当初の活動計画と得られた成果との関係)	<p>1. 4 回の委員会を開催し高齢者、子ども、障害者などを対象とした建築環境工学分野のバリアフリーデザインに関連する課題を確認し、メンバー各自がさらなる研究調査活動を行った。その結果、各メンバーよりユニバーサルデザイン環境指標設計評価基準作成のための重要参考資料などが提供され、それらについて継続的に情報交換を行った。</p> <p>2. 日本建築学会大会 (東北) において環境工学部門における研究協議会「高齢社会の環境・設備- ユニバーサル環境デザインにむけて- 」を開催した。具体的には、多様な人々の要求にスポットを当て、個々のバリアフリー設計の基本的な重要性を確認しながら、ユニバーサル環境デザインに建築環境工学研究者が如何に貢献すべきか、環境工学と建築計画による横断的な分野・視点から議論した。</p> <p>3. 九州・熊本周辺を中心としてバリアフリーデザインの実施例について見学会を行い、環境工学的な観点から実例と実情についてさらに知見を広めた。</p>
委員会活動の問題点 ・課題	<p>1. 昨今は本務先業務の多忙な委員が多く、ネットワーク拡大をねらって公開研究会等の企画実施することが難しく、日常的な意見交換も不十分になりがちである。</p> <p>2. 次年度に向けて、わかりやすい環境工学分野のユニバーサルデザイン環境設計用指標を作成するため、さらに意義ある委員会活動を企画する必要がある。</p>

* 小委員会活動成果報告書は本書式を基本とする。ただし、それぞれの本委員会において活動実績を報告する共通項目があれば、最下段に項目を追加して記述してもよい。

* 中間年度には中間評価を、最終年度には最終評価としての自己評価を記入すること。

2009 年度 小委員会活動 自己評価

(最終年度評価)

総合評価 (4段階評価)	A
総合評価に関する 自由記述欄 (理由、特記事項等)	<p>2009 年度には計 4 回の委員会を開催して委員の研究内容についての情報交換を行ったほか、研究協議会、見学会を開催して活発に活動を行った。また、環境工学分野で取り組むべき課題と研究活動について検討を重ね、「環境工学分野のバリアフリー環境設計用指標の作成」についての具体的な作業を進めた。</p> <p>2010 年度も引き続き、バリアフリー環境設計用指標の作成について、具現化に向けた取り組みを進めており、委員会独自の公開研究会や見学会等を企画して活発に研究活動を継続している。</p> <p>【研究協議会・見学会などの活動内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2009 年 8 月 27 日、日本建築学会大会（東北）において、「高齢社会の環境・設備—ユニバーサル環境デザインに向けて」と題する研究協議会を開催した。超高齢化の進行する社会状況の中で、住宅をはじめ、各種の施設や地域および都市環境の設計においては、利用する人の多様な要求に加えて、自然条件、歴史的な地域特性など、さまざまな条件を包含的に取り扱うことが求められており、この研究協議会では、利用する人の様々な要求にスポットを当て、個々のバリアフリー設計の基本的な重要性を確認しながら、ユニバーサル環境デザインとして、今後の建築環境工学の可能性について協議し、主題解説やパネリストによる討論を行った。この協議会の特徴は、建築計画と環境工学の分野交流として横断的に実施されたことである。 ・2009 年 11 月 21—23 日、熊本県を中心に山鹿市のまちづくり、イオンモールにおけるユニバーサルデザインの取り組み、ホテル・美術館および公共空間内における音によるサイン環境の見学等を実施して、建築やまちづくりに関連する環境工学的な観点から実例と実情についてさらに知見を広めた。さらに、それぞれの場所において、地域住民との意見交換会を通じて、建築や都市空間におけるデザイン活動と建築環境工学分野のかかわり、高齢者や障害者を含むユニバーサルな内容の重要性など、さまざまな啓発活動を行った。

- 総合評価は 4 段階(A>B>C>D)にて、自己評価すること。
- 中間年度における自己評価は、単年度の活動計画・目標に対する達成度にて、最終年度における自己評価は、小委員会の設置目標に対する達成度にて評価する。自己評価の目安は以下の達成度レベルを参照のこと。
 - A 評価：小委員会設置目標に対し、80%以上の達成度
 - B 評価：小委員会設置目標に対し、70%から 80%の達成度
 - C 評価：小委員会設置目標に対し、60%から 70%の達成度
 - D 評価：小委員会設置目標に対し、60%以下の達成度
- 小委員会の活動に対し、第三者的評価・外部評価（シンポジウム、セミナー等の催し物を開催した場合に収集した参加者の評価など）に相当する情報がある場合には、その内容も記述すること。